



親が子供に何かをしてやれる期間はそう長くはない。 (藤岡陽子『満天のゴール』より) 学校長 乾 文雄

先日、作家の藤岡陽子さんにご来校いただき、進路が決定している高校3年生対象にご講演をいただきました。本校のある社会科教員と、前の職場(スポーツ新聞社の記者)の同僚であった^{よしみ}誼で、お忙しい中をお越しいただいたのです。わずか30分ほどのお話でしたが、楽しくかつ深いお話に、私も心を弾ませながらお聞きしました。あつという間でした。

藤岡さんは、文章を書く仕事がしたいとの願ひがなあって入社した新聞社を数年で退社されます。そして、どうしても留学したいとの思ひから向かったのは、アフリカのタンザニアでした。帰国後は、もう一度文章を書く勉強がしたくなり、大阪文学学校(夜間部)に入られます。小説を書いては投稿する連続でしたが、なかなかうまくはいきません。そんな中、生活を安定させる仕事に就いて、小説を書き続けようと思ひ、留学先での経験にも突き動かされ、資格を取るべく看護学校に入られます。30歳の頃のことです。同時期に結婚、そして出産。まるで小説のような目まぐるしい展開の人生を歩まれます。4年かけて看護師の資格を手にした後、まだ文章を書くための勉強が足りないと思われたのか、再度大阪文学学校(昼間部)に入り直されます。

迷いながらも一つのことを追いつける。簡単にはあきらめない。どうせなら好きなことをして生きる。そんな熱い思ひが実を結んだのは2006年、第40回北日本文学賞選奨受賞。その2年後に文壇にデビューされ、2024年『リラの花咲くけものみち』で第45回吉川英治文学新人賞受賞。講演の中での「私、53歳で新人賞いただいたんです～」との明るい声が忘れられません。ちなみにこの小説はドラマ化され、この2月からNHKで放送されています。

多くの作品が映像化され、人気作家とされた今、執筆活動に専念されているのかと思いきや、週に1回程度、看護師のお仕事も続けられています。ただただ凄い方です。

私は藤岡さんの『満天のゴール』という作品を読みました。京都北部の町を舞台に、過疎地域の医療の在り方、家族の在り方、いのちとの向き合い方、出会いの不思議さなどなど。物語は、短文の妙とも言える小気味のいい文章校正で、時に滑らかに、時にでこぼ

道を進むかのように転がっていきます。悲しい出来事が続く場面もあるのですが、読む者に下を向かせることなく、胸を熱くさせては、そこから始まる未来に思いを運んでくださいます。

親が子供に何かをしてやれる期間はそう長くはない。

読み進める私に一旦停止を強いた言葉です。作品の流れの中で重要な意味を持つというよりも、ひょっとしたら、この小説の話の展開とは別に、自らが平日頃感じておられた思ひなのかもしれません。小説を書き進めながら、親としてのこの思ひを、どうしても伝えたい言葉として「さて、どこに置いたものか」と考えておられたのかもしれません。そして、「いまだ!ここだ!」と、落としどころを見つけて書かれたのかもしれません。全て想像なのですが、私にとっては印象深い言葉との出あいでした。それは、まだ職に就いていない3人の子を持つ親として、「子どもたちに何かをさせてもらえる時間はあまり多くは残ってはいないのだよ」と、優しく教えられようでもありました。

この言葉が出てくる10頁ほど前に、次の文があります。

親ってね、自分が持てなかったものを 子供に持たせたがるものなのよ、厄介なものね。

モノだけではなく、夢や理想までも、子どもに押し付けてはいないだろうか。自分にできなかったことを子どもに経験させてやりたいとの思ひが、いつの間にか「親のエゴ」にすり替わってはいないだろうか。親に^{きが}気兼ねして「ノー」と言えずに、苦しむ我が子を育てていないだろうか。「あなたの人生なんだから、あなたの好きなように生きたいんだよ」と、私に言わせないモノはいったいなんなんだろうか。そこに、「それこそが親のあるべき姿だ」というものわりの良さを主張する親Aと「好きにすればいいというのは無責任な親だろう」という頑固な親Bの顔が、コロコロと変わりながら共存する私がいいます。

さわやかな読後感に交じって、何とも言えない「ざらついた感情」が、自己を振り返るチャンスを与えてくれています。素敵で奇妙で有難い「ざらつき」です。

藤岡さんにはぜひもう一度本校にお越しいただき、生徒教職員はもちろん、保護者の皆様ともご一緒にお話を聞く機会をいただければと願っております。